

宗尊親王御詠草

土田龍太郎

後嵯峨天皇の第二皇子にましまして一品中務卿宗尊親王と聞えし宮の征夷大將軍に任せられたまひて關東に御下向ありしは建長四年四月のことにてぞありける。鎌倉に鎮まりおはせし將軍宮の御政にめでたき跡のいちじるきは、この親王の天資英邁にあらせられしゆゑなるはさることなれども、同じころ執權職にありし北條時頼またよくこの宮を輔けまゐらせしにもよれるなるべし。

しかるに時頼みまかりしころより、將軍宮のあたり、いかがりたりけむなにとやらむあわたたくあやうげになりもてゆきて、つひに宮の御身のうへにさへいとすずろなる目を見たまひしはげにあさましかりしことどもなり。

よしやあとなきはかなしごとなりとも、いふかひなきものの口のはにのりて弘がりゆくままに、そらごといつしかまことしくなりゆきて、ゆゆしき禍のきざしとなるためし世にまれなりとしも言ひがたし。これあたかも天魔のしわざのごとくにして人知のえ及ぶきはにあらず。されば今に遺れる史籍のおもてにはあらはれぬことのゆゑよし、つぶさに尋ね究めむたよりとてなければども、この亂れ、むねと良基といへる惡僧のたくみに根ざせることはた疑ひなきにたり。將軍の宮に御惱ありしとき、松殿僧正と呼ばれりたりしこの良基、宮に加持したてまつりてやがて御平癒ありしかば、そのいさをしにめでたまひしにやありけむ、良基を近く召しつかひましますこといとどしげくなるままに、この法師いつしか思ひあがりて宮の謀臣のごときふるまひのめざましくなりゆきしこと記せる文なきにあらず。うべさもありけむとこそ思ひやられるれ。時頼卒去の後、良基ひそかに與黨を語らひて北條氏を傾けむ計りごとをめぐらしたり。

この企てありとは宮つゆ知らしめさざりしかども、かかるたくみ隠すとするも隠れぬは世のならひなれば、いつしか漏れ聞えて、宮もやうやく北條執權連署に疑はれたまひしは、げに避りがたきことのはてとこそ言ひつべけれ。

文永三年七月、近國の御家人ども鎌倉に馳せ群りて兵馬街衢に滿ち、はや合戦に及ばではやむまじきいきほひとなりしかば、市井のともがら驚き惑ひあへることかぎりなかりき。かかりしほどに親王にはかに北條執權邸に渡らせたまひ、やがて武家の沙汰として御歸洛ありしかども、このときいかなるゆゑにやありけむ、宮を女房輿に乗せまゐらせしこと吾妻鏡に記せり。思ひのほかの都入り、むげにうたてかりしこといふはかりなし。

都に還りたまひて後、ある雪のいみじう降たる朝に

なほたのむ北野の雪のあさぼらけあとなきことにうづもるる身は
と詠めたまひしは罪なくて配所に赴かれしかの菅丞相に御身をおぼし擬へたりしことげに言はでも
しるかるべし。この親王敷島の道にいとすぐれてましますしかば、時の人歌の聖と仰ぎまつりて、こと
には、

日かげさす枯野の眞葛霜とけて過ぎにし秋にかへる露かな
の一首ほめののしりまゐらせしこと、増鏡によりて知るをうべし。

定家卿みまかりて後、その遺跡を継ぎしは嫡子爲家なれども、父にはをさをさ及びがたきことかく
れなかりしかば、この爲家に時の歌人どものこぞりてなびきましたかふまでのことはあらで、藤原光俊な

どいひてややもせば爲家にきほひあらがはむとせしともがらさへたえてなかりしにあらず。光俊落飾して眞觀と名乗りたれども、宗尊親王の和歌の師と頼みたまひしは、よそ人ならでこの眞觀にてぞありし。この法師の御子みこひたり左家にいどまむのけしきありしは、鎌倉將軍の歌道師範とてみづからほこることなめならざりしがゆゑにてもありけむかし。さはれ將軍宮、爲家にもまた親しみましましてことねもころなりしかば、眞觀一かたにくみしたまひしにはあらざりけらし。

宗尊親王の御詠草あまた世に遺りてその數三千首にあまれり。家の集といひつべきは眞觀の撰びまゐらせし瓊玉和歌集なれども、宮の御集とてはこれにしもかぎるべからず。御集に載れる大和歌げにさまざまにて、一ふしおもしろきあり、心こまやかに姿やさしきもあり。されば宮の風躰ふうてい一言も述べつくしがたし。さはれ御詠なべていきほひありたけ高くおぼゆるは、一いきに詠み下したまひしあとはつかなるよせいなほこもりて名残ゆかしきこと少からざるがゆゑにてもあるべし。これらの御詠おぼろけの歌讀みのえ及ぶさかひにはあらず、親王の生得しやうとくの歌才のあかしと言はむにはばかりあらむやは。

親王の歌がらのいみじくけだかきことせめてかたはしばかりだに伺ひ知らせしむるよすがともなりなむかしとて、中務宗尊親王三百首といへる御集より、とりあへずただ六首のみ左に掲げ出せり。

山のははそこも見えぬ夕暮れに霞て出る春の夜の月

あかず見る人もはかなしあだし世にをしまれむとや花の散るらむ

櫻色の衣ふきかへす春風に夢となりゆく花のおもかげ

さびしさは身にそふものとなりにけり秋よりのちの夕暮れの空

なかなかいたのめぬ夜はぞまたれける人の心のかはるならひに

夏草のしげみがしたの忘れ水たえだえ見えてゆく螢かな

(平成二十九年十月十五日受附)